

後期サファヴィー朝有力家系の戦略的資産形成

ザンギャネー族の「財産目録」を手がかりに

山口 昭彦

The Zangane Family's Strategic Land Acquisition during the Late Safavid Period

YAMAGUCHI, Akihiko

This study examines the strategies of and motivation for the property accumulation of the Zangane family, one of the most powerful elite lineages of the late Safavid period.

Despite the importance of land tenure in facilitating the long-term survival of notable families in pre-modern Iranian society, only a few case studies have focused on the accumulation and inheritance of wealth by patrician families, due mainly to the paucity of historical sources. There is a limited number of relevant archival sources regarding the Safavid period, making it difficult to compile a comprehensive list of properties possessed by elite personalities and families. This study uses unedited archival materials to study a prominent family during the late Safavid period in terms of the family's wealth accumulation and motivations.

As a minor participant in Safavid politics during the sixteenth century, the Zangane clan, the ruling family of a Kurdish tribe of the same name, began to exercise a powerful influence within the royal court as well as in the provinces by the mid-seventeenth century. Sheykh 'Ali Khan, the most prominent figure of the family, served Shah Soleyman (1664–1694) as grand vizier for over 20 years, and his relatives and descendants also held important positions until the end of this dynasty.

This study's primary source of data is a short inventory of the Zangane family's immovable properties. After the collapse of the Safavid Empire in 1722, the Ottomans invaded western Iran and produced many documents while governing the region. One of these sources, the MM590 register, which is preserved in the Prime Ministry Archives of Turkey in Istanbul, includes a

Keywords: Iran, the Safavid Dynasty, the Ottoman Dynasty, Kurds, the Zangane tribe

キーワード: イラン, サファヴィー朝, オスマン朝, クルド人, ザンギャネ族

* 本稿は、科学研究費補助金「近世イランにおける都市、農村、遊牧民に関する経済史的研究」(2004–2005年度, 研究課題番号: 16520424)の成果の一部であり、2006年度日本オリエント学会大会での口頭発表「後期サファヴィー朝エリートの戦略的資産形成: ザンギャネー族の「財産目録」を手がかりに」をもとにしている。

list of properties that were in the possession of ‘Abd al-Bāqī Khan Zangane, the grandson of Sheykh ‘Ali Khan, and his relatives. These properties consist of villages, hamlets, caravansaries, and shops, located in the Hamadan and Kermanshah provinces of western Iran.

This case study of the Zangane family outlines the historical background of this list, examines the value and limitations of the source, and reveals how the family intended to hold each property without sharing it with other (non-Zangane) proprietors. In addition, this study suggests the relatively minor importance of *waqf* endowments in their property holdings. Finally, by analyzing the geographic distribution of their estates, we hypothesize that the Zangane family, in order to stimulate commercial activities in the region, attempted to acquire villages along the primary trade routes.

目次

はじめに

1—「財産目録」作成の背景

2—大土地所有の実態

3—ワクフの比重

4—不動産の地理的分布

おわりに

はじめに

本稿は、サファヴィー朝（1501-1722）後期を代表する政治エリートのひとつ、ザンギャネー族¹⁾の所有にかかる不動産物件の内容や所有形態、さらには地理的分布を明らかにすることで、17-18世紀イランにおける名家の資産形成の実態解明に資することを目的とするものである²⁾。

近年のイラン史研究は、イラン史のなかでさまざまな姿をとって現れた有力家系の存在を指摘し、かれらが中央権力や地域社会との関わりをなかでいかにして台頭し、自らの地位を保持・拡大しようとしていたかを次第に明らかにしてきた。本稿で取り上げるサファヴィー朝期に限ってみても、宗教指導者としての学識や書記官僚としての能力を

もって歴代の王朝に仕え、権力の交代を越えて存続したとされるタージーク系都市名家にとどまらず、特定の地方知事職を世襲的に握ることによって在地社会に根を下ろした有力部族の支配家系、王都イスファハーン Eṣfahān を拠点に世界的な商業ネットワークを築いたアルメニア人商人、さらには王直属のゴラーム gholām 集団のごとき異教徒出身の政治エリートなど、多様な分野で活躍した名家の実像が浮彫にされつつある。

こうした有力家系が不動産の集積などを通じて資産形成を図っていたことは、いまさういうまでもない。宮廷エリートや地方名士、さらには商人や宗教指導者にいたるまで、各々がその財力に応じて耕地、園地、カーナート（地下水路）、住宅、市場、店舗など多様な不動産物件に投資しその収益を確保することで、自らの経済力の維持・強化を求めたの

-
- 1) ここでは、部族の支配家系を指しており、部族集団としてのザンギャネー族と区別するため「ザンギャネー族」と呼ぶ。
 - 2) 本稿では、もっぱらペルシア語史料とオスマン語史料を用いるが、地名や人名など固有名詞については、イランに関わるものであれば、原則として現代ペルシア語のローマ字転写方式やカタカナ表記を採用した。

であった。そしてかかる不動産収入こそが、彼らが世代を越えて、すなわちひとつの家系として安定した地位を確保するための重要な手段のひとつでもあった。したがって、個々の名家がどの程度の資産をどのような形態で所有していたかを検証することは、名家研究において最も基本的な作業と言えよう。

さて、彼らの不動産所有に関わる諸問題は主に二つの点から検討されるべきであろう。ひとつは、彼らがいかなる意図のもとに不動産を集積したのかという点である。たしかに、不動産への投資にあたっては、当該物件からの利潤の獲得が第一の目的であったにちがいない。しかし、ある特定の不動産を取得することは、単に金銭的な収入を確保するにとどまらず、ほかならぬ当該物件を所有することで得られる政治的あるいは社会的な、さらには宗教的な影響力を担保しようとする意図が働いた場合もあったと思われる。とりわけ、本稿で取り上げるザンギャネ族のように、特定の地域社会との関わりをもつ有力家系は、不動産集積を通じて地域社会における自らの影響力を拡張することを企図していたと考えるべきであろう。

もうひとつの論点は、既得の資産をいかにして世代を越えて継承していったのかという問題である。とりわけ、イスラム法に基づく均分相続が一般的で、ときに為政者による没収が行われたイラン社会において、財産の持続的な所有と次世代への相続は、名家の存続にかかわる最重要課題であった³⁾。従来、ワクフ制度がこうした財産の細分化や没収による喪失を防ぐための手段として機能したとも言われてきたが⁴⁾、そうであれば、財産のうち、はたしてどの程度を寄進財の形で「保有」

していたのかも同時にまた問わねばならないだろう。

とはいえ、イラン史研究ではもともと社会経済史研究が遅れていることもあって、エリート家系の資産形成に関しては、現在までのところ、そのごく一部について、特定の時代や地域の事例が紹介にされるにとどまっている⁵⁾。とりわけ、ペルシア語年代記と欧文旅行記を主たる史料とするサファヴィー朝史研究にあっては、有力家系の有した資産に関する研究はほとんど進まず、こうした研究を可能にする史料の発掘が喫緊の課題となっている。

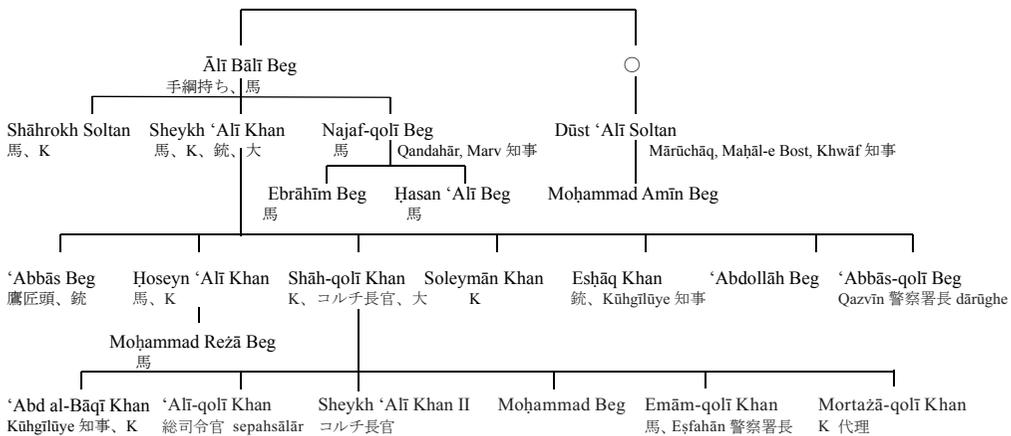
本稿は、上記二つの問題系のうち、とりわけ前者に重点をおきながら、ザンギャネ族の財産形成に見る戦略性を明らかにしようとするものである。すなわち、同家にかかわる未公開の一文書史料の分析を通じて、彼らが王朝崩壊の段階で所有していたと思われる不動産の種類や持分（物件全体を6ダング dāng とした場合の所有の割合）に見られる所有形態上の特徴、寄進財に設定された財産の割合などを明らかにし、あわせて、この家系がいかなる動機に基づいてこれら不動産の集積を図ったかを検討する。

クルド系部族のひとつであったザンギャネ族は、16世紀初頭、サファヴィー朝成立まもなくしてその支配を受け入れ、17世紀に入ってアッバース1世 Shah 'Abbās I (1588-1629) の主馬頭 amirākhorbāshī に拔擢されたアーリー・バーリー・ベグ Āli Bāli Beg の血統がその支配家系になると、一門内部でケルマーンシャー Kermānshāh 地方の知事職を独占的に継承するとともに、王の主馬頭職もほぼ世襲するなど宮廷エリートとし

3) 同様の関心に基づく研究として、阿部 2009、阿部 2010 などがあり、18世紀から19世紀にかけてタブリーズ周辺の有力部族ドンボリー族の支配家系内部でどのように資産が形成・継承・再編されたかを詳細に検証している。

4) ワクフ制度普及の背景をこうした機能と結びつけて最初に論じたのは、Cahen 1961 であろう。

5) ただし、比較的史料に恵まれたカージャール朝期については、研究が進んでいる。たとえば、注3に挙げたもののほか、近藤 1994; 1996; 2001.



馬：主馬頭 amirākhorbāshi、銃：銃兵隊長 tofangchī-āqāsi、K：Kermānshāh 知事、大：大宰相

血縁関係不明のもの

'Alī Khān Soltan: Khwāf 知事

Dürmīsh Khan Beg: Khwāf 知事

Hājji 'Alī Khan (Sheykh 'Alī Khan の甥)：アゼルバイジャン総督 beglarbegī、銃兵隊長

Rostam Beg: Khwāf 知事

Sevendūk Soltan: Bahreyn 知事

Mohr 'Alī Beg: ケルマーンシャー知事代理

Qanbar Soltan: Shamīl va Mīnā 知事

Shāhvīrdī Khan: 'Abd al-Bāqī Khan の父方のいとこ、ケルマーンシャー知事 (?)

図1 ザンギャネー族系図

でも頭角を現した⁶⁾。なかでも、アーリー・バーリー・ベグの子シェイフ・アリー・ハーン Sheykh 'Alī Khan は、第8代君主ソレイマーン Shāh Soleymān (1666-94) の大宰相 ṣadr-e a'ẓam として20年の長きにわたって国政を担ったのであった。こうしてサファヴィー朝末期に至るまで、ザンギャネー族は中央・地方ともに多数の役職保持者を輩出し、後期サファヴィー朝期屈指のエリート家系のひとつとなっていた(図1参照)⁷⁾。

この一族の資産状況を検討するにあたって主たる史料として用いるのは、現在、トルコ共和国首相府国立文書館オスマン文書局にMM (Maliyeden Müdevver) 590として所蔵されているムカータア台帳である。1722

年のイスファハーン陥落でサファヴィー朝が実質的に崩壊したのを受けて翌1723年にイラン西部に侵攻したオスマン朝が作成したこの台帳には、当時のザンギャネー族の「当主」にあたるアブドルバーキー・ハーン 'Abd al-Bāqī Khan がオスマン朝当局に請願し、その所有権を再確認された不動産の一覧表が含まれている。数ページにわたる目録には、後述するように、その作成の経緯にかかわる文書が添付されたりうえで、アブドルバーキー・ハーン自身を含むザンギャネー族がハマダーン Hamadān 州やケルマーンシャー州に所有していた村や枝村、さらには隊商宿や店舗など、およそのべ80件にのぼる物件が、その行政上の所属や持分などととも列挙され

6) タフマースブ Shāh Tahmāsp (1524-1576) 時代まで、クルド系諸侯は概ねサファヴィー朝支配体制の中核から疎外されていたが、17世紀に入る頃から政治エリートとして台頭するものも現れた(山口2007; 山口2011; Yamaguchi 2012)。

7) アーリー・バーリー・ベグ以下、ザンギャネー族の台頭については、Matthee 1994: 80-81, 92; Matthee 2012: 62-74も参照のこと。

ている。あくまでも特定の時点における不動産所有を示す史料ではあるが、イラン史研究にあっては名家のもつ財産の目録が残されていること自体珍しく、その点、貴重な史料と言えよう。

以下では、はじめに、目録の作成された経緯を他の史料を援用しながら検証し、当該史料の価値や限界を検討する。そのうえで、目録に記載された不動産について所有形態やその地理的分布に見られる特徴を指摘する。具体的には、主として3つの視点からザンギャネー族の資産形成の特徴を検討する。まず、ザンギャネー族がどのような形態の資産をどれほどの持分で所有していたかという基本情報を整理する。第二に、一族がサファヴィー朝期に設定したワクフに関わる文書数点と比較しながら、当該の一覧表にどの程度の寄進財が含まれているかを検証する。第三に、彼らの所有した不動産の地理的分布に着目し、その資産形成には単に個々の物件からの収入確保のみならず、その支配地域たるケルマーンシャーを含むイスファハーンからバグダード Baghdād 方面への交易路の維持・管理という、より高度な戦略的意図が働いていたことを仮説として提示したい。

1—「財産目録」作成の背景

すでに記したように、オスマン朝が作成したムカータア台帳の中にザンギャネー族に

関する一件書類が挿入されている。文書館で付されたページ番号に従えば、66 ページから74 ページまでのおよそ10 ページ足らずが一族の資産にかかわる記録であり、内容的には一族の「財産目録」ともいべきものである。

目録作成の経緯については、目録の末尾や余白に挿入された勅令の写しのほかに、同時期の他の文書史料の中でも触れられている (MM 590: 66-71, Ali Emiri, III. Ahmed, 425, Mühimme 135: 106, 429)。それらによれば、この目録は、当時、オスマン朝からトゥーイ・セルカーン Tüy Serkân とボルージェルド Borüjerd の統治権を与えられていたアブドルバーキー・ハーンが、一族の財産に対する所有権の確認をオスマン当局に求めたことに由来している。

アブドルバーキー・ハーンについては、後にナーデル・シャー Nader Shāh (1736-47) の命でオスマン朝へ遣いしたことで知られるが (Hammer, vol. 14: 176-177; Lockhart 1993: 102-106; Tucker 2006: 45-56)、サファヴィー朝末期にはクーフギールーイエ Kūhgilūye 知事⁸⁾を経てケルマーンシャーの知事職にあった⁹⁾。ケルマーンシャー知事、コルチ長官、大宰相を歴任したシャー・コリー・ハーン Shāh-qolī Khan の息子であり、シェイフ・アリー・ハーンの孫にあたる人物である (Badaye: 15; Nader Shah (Floor): 73)。オスマン朝によるケルマーンシャー侵攻に際し何ら抵抗することなく進んで服従し¹⁰⁾、ケ

-
- 8) ベルシア湾に近いクーフギールーイエには、17世紀後半以降、しばしばザンギャネー族のものが知事として任じられていた。まず、シェイフ・アリー・ハーンの子ホセイーン・アリー・ハーン Hüseyn 'Ali Khan が1086年(1675/76)にベフバハーンとクーフギールーイエの知事に任じられ (Farsname: 488)、その後、アブドルバーキー・ハーンを経て、サファヴィー朝崩壊後には、ホセイーン・アリー・ハーンのおそらく弟であったエスハーク・ハーン Eshāq Khan が、即位したばかりのマフムード・シャー Maḥmūd Shāh によってクーフギールーイエ知事に任じられている (Badaye: 27)。
- 9) アフガン族のイスファハーン包囲が続いていた1722年3月頃、クーフギールーイエ知事職にあったアブドルバーキー・ハーンはサファヴィー朝宮廷より救援の命を受けてイスファハーンに向かい、同時に知事職を解かれている (Badaye: 15)。ケルマーンシャー知事職を継いだ正確な時期は不明だが、オスマン軍がケルマーンシャーを掌握する1723年10月16日以前であるのはまちがいない。
- 10) 「アザーンと金曜礼拝をスンニー派の伝統に則って」執り行うことを条件に身の安全を保証されたという (Küçük Çelebizāde: 79-81)。オスマン朝によるケルマーンシャー占領の経緯については、Uzunçarşılı 1988: 180-182。

ルマーンシャー知事職は解かれたものの、その見返りとして1137年ラビー・アルアッワル月4日(1724年11月21日)にはトゥーイ・セルカーンの統治権を与えられ、さらに翌1138年サファル月17日(1725年10月25日)にはボルージェルドを加増されている¹¹⁾。1728年¹²⁾の夏にはイスタンブールのオスマン朝宮廷に参内し、大宰相ダーマード・イブラーヒーム・パシヤ Dāmād Ibrāhīm Pasha から慰撫を受けるとともにあらためてトゥーイ・セルカーンとボルージェルドの統治権を安堵されている¹³⁾。

アブドルバーキー・ハーンが、オスマン宮廷に対し自らの所有する私有地への「介入」がないようお願いしたのもこの時であろう。少し長いが目録作成の経緯を記した1142年サファル月23日(1729年9月17日)付の勅令を以下に訳出する¹⁴⁾。

現在、ボルージェルド県とトゥーイ・セルカーン県の知事 mutasarrıf であるアブドルバーキー・パシヤの父祖のうち、主馬頭のアリー・ベグ ‘Ali Beg [アーリー・バーリー・ベグ]、シェイフ・アリー・ハーン、シャー・コリー・ハーン、ホセイン・アリー・ハーン(注8参照)はスンニー派であったが、100年以上にわたる彼らの奉仕に対し

アジャムのシャーたちは恩恵と厚誼で報い、忠誠と実直さにおいて彼らの奉仕はまさっていたとして、その奉仕に対し、いくつかの村 kurā’, 枝村 mezārī’, 私有地 emlak, 不動産 ‘akārāt の所有権を認め temlik idüp, 彼らが占有していることを確認して寄進文書 vakfnâme や王の命令 rakam を与えたので、彼 [アブドルバーキー・ハーン] の父祖が [これら村や枝村などの不動産を] 財産として所有し、その一部を両聖地の貧者たち、マドラサ、金曜モスク、[イマームの] 聖廟に寄進し、その余剰から近親のものとともに生活手段を得ている。しかし、上記の寄進財 evkāf のうち、あるものはアフガン族の支配する領域にとどまり、またあるものは、ハマダーン、ケルマーンシャー、ダルガズィーン Dargazīn, ソルターニーエ Solṭāniye, ターヴミーン Ṭāvmin, ネハーヴァンド Nehāvand, トゥーイ・セルカーンの諸郡にある。[オスマン朝による] 上記の諸国の征服において、そしてイラン遠征が起こってから見られた、彼 [アブドルバーキー・ハーン] の奉仕と忠誠への対価として、[それらの財産は] 上記総督 mirmirān [アブドルバーキー・ハーン] に回復・授与された。しかし、彼の手元には適当な証書となる至高なる勅令がないので、有効な

11) Mühimme 135: 429; Küçük Çelebizade: 232; Tevcihat: 167, 169. 1717年から1730年までのオスマン朝の地方行政組織を記した Tevcihat によれば、ネハーヴァンド Nehāvand とボルージェルドを統治していたアリー・パシヤ ‘Ali Pasha と住民との折り合いが悪かった上に、「上記の郡 [トゥーイ・セルカーン] には収穫がなく bī-hāsıl olup, 知事であるアブドルバーキー・パシヤの出費には十分でないので」、ボルージェルドが加増されたという (Tevcihat: 167, 169)。アリー・パシヤについては、Sicill: iii, 623.

12) 経緯は不明だが、オランダ東インド会社の記録によれば、「ケルマーンシャーの知事」であったアブドルバーキー・ハーンは1726年9月頃の時点で、イスファハーンにあったアフガン族のアシュラフ Ashraf によって捕らわれており、オスマン朝がその釈放を要求したにもかかわらずその一族のもの3名が処刑されている (Afghan Occupation: 246-7)。その後、アブドルバーキー・ハーンは、釈放されたものと思われる。

13) Küçük Çelebizade: 565. なお、オスマン朝の「紳士録」たる Sicill-i Osmanî にはアブドルバーキー・ハーンについて次のようであるが、オスマン宮廷で亡くなったとあるのは誤りである。「アブドルバーキー・パシヤ。イラン人である。1140年(1727-28年)にケルマーンシャーの総督であったとき高貴なる王朝に避難 arz-ı dehālet した際に、ルメリ・ベイレルベイの位階 pāye を与えられ、辺境にある Neviveskân (?)^{ママ} [トゥーイ・セルカーン] の知事 mutasarrıf となったが、この年あたりにオスマン宮廷に連れて来られて、ここで亡くなった」(Sicill: iii, 298)。

14) MM590: 70-71. 同様の主旨の勅令が、Mühimme 135: 106, 429 にもある。

文書が下賜されるよう恩寵を願い出て、上記の地域における郡や都市にある寄進財や私有地や村や枝村が、何らかの形で彼の手元にある台帳及びアジャムのシャーたちから受けた勅令 *rakam* や証文 *senedân* に基づいて、上記総督によって安堵され、確認するかたちで [それらの不動産がアブドルバーキー・パシャによって] 掌握、所有され、誰にも介入させることがないよう 1140 年ズー・アルヒッジャ月末 [1728 年 7-8 月] において至高なる宮廷から勅令 *emr-i şerif* が与えられた。そのため、彼が [オスマン当局に] 送った帳簿に基づいて、安堵された村、枝村、不動産の登録簿 *tahrîr defteri* から印の押された写しを作り、その後、上記総督の代理人 *vekil* たちや、近親のものたちの前でひとつひとつ情報が得られ、調査された。その際に、彼ら自身の確認と承認に基づいて、いずれの村であれ、その持分やその所有者の名前を明記した台帳が作成されて [オスマン当局に] 送付されたので、どの村にあってもそれを所有することになる持分から国庫に入る穀物や収入が、聖法に基づき、かつ上記総督の代理人や *subaşı* たちが承知するかたちで記録されて帳簿に記され、徴税請負人たち *mültezimin* の請負分 *zimmeler* から除かれる必要がある。(以下略)

まず確認すべきは、そもそも目録が作成

された背景、すなわち、アブドルバーキー・ハーンが私有地に対する所有権の確認を求めた理由であろう。「誰にも介入させることがないよう」との確認を 1140 年ズー・アルヒッジャ月末 (1728 年 7-8 月) に勅令の形で受けているが、この件について、同時期に発せられた別の勅令では、「ボルージュルド県とトゥーイ・セルカーン県にいるカーディー (裁判官) たちへの命令」として、「ボルージュルドとトゥーイ・セルカーンの知事であるアブドルバーキー・パシャが…至福の御門に上奏し、… [彼が] ボルージュルド県とトゥーイ・セルカーン県に任じた代官たち *mütesellimler* に [それらを] 独立して管理させ、カーディー、知事 *voyvoda*、徴税請負人 *mültezim* が勅令もなく [当該地域の] 諸事に干渉・侵略することを許さず、当地にある [彼の] 家族や従者たちが保護される旨、勅令を欲している」とある (Mühimme 135: 106)。おそらく、アブドルバーキー・ハーンがイスタンブルに滞在している間、カーディーや徴税請負人たちがザンギャネー族の私有地に介入することを恐れるが故に¹⁵⁾、彼らの所有する村が徴税請負の管轄からはずされて、直接国庫に税を納入する形となるようオスマン当局に求めたものと思われる¹⁶⁾。そのために、サファヴィー朝期の台帳や証書類をオスマン当局に提出し、その上で関係者の確認を経てあらたに台帳が作られ、私有許可証が発給されたわけである¹⁷⁾。

15) 実際、枢機勅令簿に記録される 1142 年ラビー・アルアッワル月初め (1729 年 9 月末から 10 月初め) 付の勅令によれば、アブドルバーキー・ハーンは、カーディーによる不当な介入をオスマン当局に訴えている (Mühimme 135: 449)。

16) 上に紹介した MM590 の記事の続きには、「国庫に入る現金や収入が、国家の徴税請負人の徴税請負から割引かれる *tenzil olunmak* 必要がある」との文言が見える (MM590: 71)。

17) この時期、こうした形で、サファヴィー朝期以来、所有していた私有地の所有権をオスマン朝に確認を求める事例は少なくなかったようだ。たとえば、1141 年ラビー・アルアッワル月半ば (1728 年 11 月半ば)、サファヴィー朝末期に司令官 *sepahsâlar* を務めたエスマーイー・ハーン *Esmâ'il Khan* の子、ベイラム・アリー・ハーン *Beyrâm 'Ali Khan* が先祖伝来の土地の所有権の承認を求めている (Mühimme 135: 206)。他方で、征服地での検地を進めていたオスマン朝は、1138 年ラビー・アルアッワル月中旬 (1725 年 11 月) の時点で、「ワクフであるとか、私有地であるとか主張して国庫に対して害をなす」ものがあるとして、ハマダーン、ケルマーンシャー、アルダラーン各州での検地を管轄するハマダーン財務官にそうした干渉を排除するよう厳命している (Mühimme 133: 30)。オスマン朝の占領当局と現地の土地所有者たちとの間で、激しい駆け引きが行われていたことがうかがわれる。

さて、この史料を「財産目録」として利用するにあたりまず問うべきは、史料がザンギャネ一族の所有した、あるいは寄進財として設定していた資産を網羅的に含んでいるかという点である。上の引用から、以下の点が確認または推測できる。

第1に、目録が、アーリー・バーリー・ベグ以来、ザンギャネ一族がサファヴィー朝によって与えられた物件を多く含んでいるという点である。実際、その中にはサファヴィー朝君主との共同所有となっているものも見られる¹⁸⁾。もちろん、すべての不動産が忠義への報奨として下賜されたものとする必要はないだろう。しかし、目録に列挙される不動産の多くが、17世紀以降初頭以降、一族が台頭する過程で取得されたものであることはまちがいない¹⁹⁾。アーリー・バーリー・ベグ以前、ザンギャネ族はさしたる地位を占めておらず、この目録が示すがごとき大規模な不動産経営に従事していたとは考えにくいからである。

第2に、所有する不動産の一部が寄進されて、その収益が聖地の貧者への施しや宗教施設の運営・維持に使用されるとともに、一部はザンギャネ一族の生活費にあてられていたことがうかがわれる。一族が設定したワクフに関する文書のいくつかは伝来しており、後にあらためて照合する。

第3に、この財産目録に登録された物件以外にも、アフガン族支配下の地域にも彼らの寄進財産が存在したことである。したがって、目録に登録された不動産はオスマン占領下にあったものに限られ、一族の財産を網羅的に含んでいるとは断定できないことになる。ま

た、後に見るように、他の史料では、ザンギャネ一族のものがイスファハーンやベフバハーン Behbahān などにもワクフを設定したと言及されているが、それについてこの目録は何も語らない。かかる意味においては、この目録が不完全なものであることは否定できない。ただし、17世紀末にサファヴィー朝を訪れた仏人司祭サンソン Sanson は、シェイフ・アリー・ハーンがケルマーンシャー州とハマダーン州に多くの村を所有していたと証言しており (Sanson: 78-79)、この目録に記載された物件がザンギャネ一族のもつ財産の中核部分であったことは疑い得ない。

第4に、目録に含まれる「ザンギャネ一族」の範囲が曖昧なことである。目録のなかでも確かに akraḇā という言葉が使われており、アブドルバーキー・ハーン以外に、その息子、父方のおじやその息子などが現れる。しかし、はたしてこれらがアーリー・バーリー・ベグの血統を受け継ぐ男系子孫のうちどこまでを含んでいたのかは不明であり、しかも、正確な血縁関係を同定できず系図に表記できないものも少なくない。他方、図1の系図にあるように、他の文献史料によればアブドルバーキー・ハーンには少なくとも5人の兄弟がいたと考えられるが、彼らが目録の中で言及されることはない。要するに、ここでは「ザンギャネ一族」といっても、アーリー・バーリー・ベグの血統をすべて含んでいるわけではない。とはいえ、一族の間で継承されてきたケルマーンシャーの知事職を握り、当時、一族の「当主」ともいべき立場にあったアブドルバーキー・ハーンと彼に親しいものの財産はほぼすべてここに記載されていると考

18) たとえば、ハマダーン州クーフパーイェ Kūhpāye 郡のエンジェラース Enjelās 村の2ダーングは、サファヴィー朝のシャーの持分であると記されている (MM590: 67)。

19) サファヴィー朝側の史料は、1039年シャッワール月29日(1630年6月11日)の記事として、「主馬頭であるアリー [アーリー・バーリー]・ベグの村ソルハーバード Sorkhābād が、マラーゲ Marāghe 知事でサフィ1世 Shāh Ṣafi I (1629-42) の有力武将の一人であったアーカー・ハーン・モカッドム Āqā Khān Moqaddam らによって破壊されたと記している。この村は「財産目録」にも記載されており、このことは目録がアーリー・バーリー・ベグの時代からの不動産をも含んでいることを裏付ける (Kholasat: 86)。

えてよからう。

以上を要するに、この目録にはアブドルパーキー・ハーンがオスマン朝当局にその所有権の承認を求めた財産が記されており、その大半はザンギャネー族が頭角を現す17世紀以降に集積されたものであろう。また、一族の財産がハマダーン州とケルマーンシャー州以外にも分布していたことはまちがいないが、この目録に記載されたものが彼らの資産の核をなしていたと言える。

目録には全部で72件の項目が列挙されている。一つの項目に複数の不動産が含まれていることもあり、その内訳は農村部では村が76件、枝村が3件、園地が1件、都市部では隊商宿が5件、店舗が101件、ハンマームが3件となっている。それぞれの物件について、その物件の種類、その名称、行政上の所属と所有者、加えてオスマン朝による征服以前の状況と現状とが簡潔に記されている。ひとつの物件に対し複数の所有者がある場合には、個々の所有者の名前と持分が記される。また、後に見るように、オスマン当局がいったん没収して部外者に売却した場合には、しばしばザンギャネー族の誰が買い戻したかが明記されている（表1参照）。

2—大土地所有の実態

目録に現れる物件のうち、まずは、その大部分を占める村や枝村に焦点を当てて分析してみよう。具体的には、ハマダーン州やケルマーンシャー州を対象にオスマン朝が同時期に作成した検地帳²⁰⁾ TT906, TT907, TT912を使って村の担税者の数を割り出し、それによって一族の所有する村がどの程度の規模であったかを見ておこう。

登録された76村のうち検地帳で確認できたのは68村である。およそ9割の村が確認

できたことになる。これらの村のうち、検地帳で「担税者なし hāli ‘an’il-re‘āyā」となっているものが12件あり、それらを除く56村が有人である。このうち、最小が担税者3人、最大は268人であり、一口に村といっても大小様々であった。平均は、37.7人となる。ケルマーンシャー州（ロレスターン Lorestān 州を含む）とハマダーン州全体での有人村1,589村の平均担税者数が18.4人であることから、ザンギャネー族が一部であれ所有していた村は、平均のおよそ倍の規模という、相対的に大きな村であったことがわかる²¹⁾。

ところで、村落を所有する場合、イランではしばしば単一の村落を複数のものが共同所有することが少なくないとされてきた。たとえば、かつて岩武昭男は、イルハン朝期の政治家ラシード・アッディーン Rashid al-Din のワクフ文書を詳細に検討する中でその寄進財が各地に散らばる多数の微細な土地片から構成されていることを明らかにし、一般に大土地所有者と考えられがちなワクフ設定者たちが、かならずしも特定の在地社会に独占的な影響力を持つ「封建領主」ではなかったと指摘している。そのうえで、モンゴル侵入期以降の西アジアの社会において微細な単位による不動産所有が常態であったと考えられるとしている（岩武1999: 280-282）。

この指摘を参照枠として、ザンギャネー族の所有していた不動産の形態を確認してみよう。これらの村落のそれぞれについて、所有者とその持分をみると、アブドルパーキー・ハーン以外に、その息子、いとこ、おじなどとされる人物が確認できるが、ザンギャネー族との関係がまったくわからないものも少なくない。確実にザンギャネー族であると思われるものに焦点を当てると、76村のうちおよそ6割の48村が丸ごと所有されており、

20) この時期のイラン関係のオスマン検地帳の作成経緯や様式等については、山口2000: 211-223; Yamaguchi 2003: 148-153を参照。

21) 当時のハマダーン州における村落の規模の詳細については、Yamaguchi 2003: 155-163を参照。

そのほかについても概ね村の持分の半分以上を所有していたことがわかる。丸ごとを所有しているものに限ると、アブドルパーキー・ハーンか、あるいは一族の他の構成員による単独所有が43件、一族のもの複数名によって村全体を所有している例が5件ある。アブドルパーキーについてのみ言えば、彼が単独で丸ごと所有している村は全部で29村あり、そのほか彼が一部を所有している村も24村ある。

たしかに、財産の中には村の一部を所有しているだけのものもあるが、大半は村全体ないしは半分以上をもっており、ことザンギャネ一族の財産に関する限り、微細な単位で不動産を所有していたわけではなかったことは明らかである。むしろ、村を丸ごと所有しようという意志が強力に働いていたと言える。しかも、後に見るように、その財産は特定の地域に集中しており、この一族はまさに「大土地所有者」であったと言って差し支えないであろう。そして、このことは、おそらく、地主として彼らが個々の村を一括して支配し得たことを示しており、この事實は、地主と農民との関わりを考えるうえで大きな意味もっていると思われる。

3-ワクフの比重

従来、イスラム法の規定する均分相続法による財産の細分化や時の為政者による恣意的没収を回避するための手段として、ワクフ制度が利用されたと言われてきた。他方で、少なくとも、カージャール朝期に関する限り、

資産のなかに占める寄進財の割合が極めて小さい事例もあることが、既に報告されている²²⁾。こうした先行研究を踏まえて、サファヴィー朝後期のザンギャネ一族の財産において、寄進財がどの程度の比重を占めていたのかを検証するのが、本節の課題である²³⁾。

まず問題とすべきは、財産目録に列挙されている物件のうち、寄進財となっているものが含まれているか、また、含まれているとすればそれはいずれの物件かという問題である。これについては、幸い手がかりがある。目録には以下の通り全部で7件の物件が寄進財であると明記されている。これらは、おそらく寄進財であるがゆえに、オスマン朝による征服後、いったんオスマン朝の国庫 *beytü'l-mâl* によって回収されて一部あるいは全部が部外者に売却された後、さらにその人物からアブドルパーキー・ハーンかあるいはその親族が買い戻したと付記されている。これに該当するのは、ゴンバレ *Gonbale* 村、カレ・ヴァリー *Qare Vali* 村、ヴァサジュ *Vasaj* 村、ホシャーブ *Khoshâb* 村、バハール *Bahâr* 村、シェヴェリー *Sheverîn* 村、ソルターナーバード *Solţânâbad* 村、ハマダーンの隊商宿（「インド人の隊商宿 *Kârbânsarâ-ye Honûd*」と「キャマーラー隊商宿 *Kârbânsarâ-ye Kamâlâ*」）である²⁴⁾。とはいえ、以下に見るように、実際には、これらはザンギャネ一族の寄進財の一部に過ぎなかった。

サファヴィー朝期にザンギャネ一族が設定したワクフについて、現在までのところ少なくとも以下の4点の文書が残されている。

-
- 22) 資産の中に占める寄進財の割合が高くない場合もあり得ることは、すでに近藤信彰がカージャール朝時代の一官人の資産やワクフを分析する中で指摘している（近藤 2001: 19）。
- 23) セファトゴルによれば、17世紀以降、シャーをはじめ政治家、廷臣などのあいだでワクフが広く行われていたという。ザンギャネ一族によるワクフ設定もそうした歴史的な脈で捉える必要があるのは言うまでもないが、ここではその点は特に分析しない。この時期のワクフ設定の広がりや国家による管理については、Sefatgol 1999: 211-214。
- 24) これら7つの物件以外に、寄進財とは記されていないが、同様に一旦国庫に没収されて部外者の手に渡ったうえで、再びザンギャネ一族が回収した例が二つある（表1の3と71）。これらが、ワクフであったかどうかは不明である。

1—ビーソトゥーン Bisotūn にある隊商宿にかかわるもの、2—ハマダーン市のマドラサにかかわるもの、3—サイドや12イマーム派のしかるべき人々への援助を目的としたもの、4—もっぱら自らの子孫を受給者とする家族ワクフ²⁵⁾。これらのワクフ文書と財産目録との関係を以下、検証する。

ビーソトゥーンの隊商宿を対象とするワクフは、おそらくザンギャネ一族が設定したもっとも初期のものと思われる²⁶⁾。この隊商宿はハマダーンとケルマーンシャーとの間を結ぶ交易路沿いにあるビーソトゥーン村の西に「アッバースの隊商宿 Kārvānsarā-ye ‘Abbāsī」としていまも残る²⁷⁾。ビーソトゥーンの摩崖碑文のひとつを削って彫られたワクフ文書によれば、このワクフは1093年シャッワール月(1682年10月)に当時大宰相であったシェイフ・アリー・ハーンによって設定されたものである。ワクフ文書には、隊商宿の運営とサイドの保護のために、近くを流れるカレ・ヴァリー川に沿った村や枝村の収入が充てられると規定されている。これに対し、財産目録にはカレ・ヴァリー村と園地と挽き臼が登録され、「その土地はシェイフ・アリー・ハーンの財産 mülk であったが、荒廃した隊商宿と彼の子孫たちのために寄進・

規定され、毎年アジャムのシャーの国庫に37.5アクチェ beyāz akçe を払うことになっていたと伝えられた。[オスマン朝による]征服後、ハリール・アー Halil Ağa という名のものが上記の土地を300グルシュ guruş で国庫から購入したが、アブドルパーキー・パシヤの父方のおじであるアブドラーに再び売却した bey ü ferāğ という情報が与えられた」と明記されている(MM590: 67)。この村が、当該ワクフの寄進財であったことはまちがいない。

同じくシェイフ・アリー・ハーンが大宰相職にあった1100/1688年に設定したものとして、ハマダーン市のマドラサに関わるものがある。ワクフ文書をみると、ハマダーン市内外の商業施設や村などが多数寄進されている(表2参照)²⁸⁾。都市部の寄進財は Mirzā Kamālā (または Kamāl) 隊商宿とその周辺の馬小屋や店舗からなっている。財産目録にもハマダーン市内の二つの隊商宿が登録されており、いずれも最終的にアブドルパーキー・ハーンが所有していることになっている。このうち、一方はキャマーラー隊商宿と呼ばれており、ワクフ文書の物件一覧の筆頭に書かれているもの(表2のNo. 1)と同一と考えていだろう²⁹⁾。残念ながら、ワクフ

-
- 25) これら以外にも、ザンギャネ一族のものが他地域で設定したワクフが知られている。たとえば、シェイフ・アリー・ハーンの子ホセイーン・アリー・ハーンは、1089年(1678-79年)、クーフギールーイエ知事任時に、管轄下にあったベフバハーンのヘイラーバード Kheyrābād 川のほとりにマドラサを創設し、学生たちの必需品や生活の糧のために店舗や公衆浴場からなる小市場を町から東へ4ファルサフのところを作り、ヘイラーバード村も寄進している(Farsname: 488)。
- 26) ビーソトゥーンに残されたワクフ文書を翻刻した Golzari: 410-413 のほかに、ケルマーンシャー州ワクフ局で保管される写しも翻刻されている(Zendegan: 7-11)。
- 27) この隊商宿については、Golzari: 404-409. 1674年の秋にこの隊商宿に滞在した Bembo によれば、「シェイフ・アリー・ハーンの隊商宿」と呼ばれていたようだ(Bembo: 371)。また、1686年にここに滞在したヘッジ Hedges は、この隊商宿がイランで最良のものであったと証言している(Hedges: 215)。
- 28) Madrase. また、原文書と写しは Mikrofilm 2181, 7060 としてテヘラン大学中央図書館に保管される。なお、このマドラサは、現在も「シェイフ・アリー・ハーンの大マドラサ」として運営されている。現管財人のモルタザー・ザンギャネ Mortazā Zangane 氏にはマドラサ内部はもとより、ハマダーン市内外に点在する主なワクフ財に案内していただいた。
- 29) 持分については、二つの文書の間で異同がある。ワクフ文書では隊商宿の半分強がワクフ物件となっているが、財産目録では隊商宿全体がアブドルパーキー・ハーンの所有にかかるとされている。もともと実際に所有していた物件の一部を寄進したのか、それともワクフ設定後、何らかの形で物件全体を入手したのかは不明である。

文書に記された個々の店舗や馬小屋を財産目録に確認することはできないが、寄進財の中でも筆頭に記されている隊商宿が最も重要なものであったことはまちがいない。都市部にある寄進財の主要部分は財産目録にも記されていると考えていいだろう。農村部については、ワクフ文書にはホシャープ村（表2のNo. 25）とそれに付属する枝村や園地、挽き臼などのほかに、4つの冬営地が含まれている。財産目録を見ると、「ホシェアープ村と園地と挽き臼」が全てアブドルパーキー・ハーンの所有に帰していることがわかる。冬営地については記されていないが、農村部の寄進財の主たる部分は財産目録に挙げられていると見ていい。以上のように、寄進財の大半は、財産目録では寄進財と明記されていないが、そこに含まれていたと言えよう。

3つ目のワクフは、シェイフ・アリー・ハーンの子で主馬頭やケルマーンシャー知事職も務めたホセイン・アリー・ハーンが1097年ムハッラム月19日（1685年12月16日）に4人の息子モハンマド・ジャヴァード・ベグ *Moḥammad Javād Beg*、ソレイマーン・ベグ *Soleymān Beg*、モハンマドコリー・ベグ *Moḥammad-qolī Beg*、モハンマド・ベグ *Moḥammad Beg* とその男系子孫を対象に設定した家族ワクフである³⁰⁾。そこには、カズヴィーン *Qazvīn* やイスファハーンの物件も含まれており、一族の財産がハマダーンやケルマーンシャーを越えて広がっていたことを示している（表3参照）。これらのうち、ハマダーンやケルマーンシャーの寄進財の多くは、財産目録に見いだすことができる。ケルマーンシャーの隊商宿については、寄進財となっているものと財産目録に記録されているものが同一かどうかは確認できないが、その可能性は高い。また、財産目録に

よれば、ハマダーンにはアブドルパーキー・ハーンが上記ミールザー・キャマラー隊商宿のほか「インド人の隊商宿」も所有していたが、当該ワクフ文書にはこの隊商宿が寄進財となっていることが明記されている。このように、ワクフ文書に記載されているハマダーンとケルマーンシャーの物件32件のうち、22件が財産目録にも記載されていることが確認できる。ただし、表1と照合すると、これら22件のほぼ全てがアブドルパーキー・ハーンの所有となっており、ワクフ設定者たるホセイン・アリー・ハーンの4人の息子の名前は現れない。

4つ目は、同じくシェイフ・アリー・ハーンの子でアフガン族の統治下でクーフギールイエ知事などを務めることになるエスハーク・ハーン（注8参照）が1131年ラビーアッサーニー月（1719年2月-3月）に設定したもので、サイイドやその他の12イマーム派に連なる人々の援助を対象としている³¹⁾。そこでは二つの枝村 *Qomeshe* と *‘Aliābād* が寄進財とされているが、そのうちの *Qomeshe* は、ワクフとは明記されていないが、財産目録にも登録されている。他方、アリー・アーバードは、目録で確認できない。なお、目録によると、*Qomeshe* 村は、エスハーク・ハーンではなく、アブドルパーキー・ハーンの所有となっている。

なお、これら4つのワクフ文書に触れられてはいないものの、財産目録によれば寄進財となっているものが5件（表1で○となっているもの）残っているが、これらについては、今のところ詳細は不明である。

以上を要するに、財産目録に記載されたのべ82件のうち少なくとも29件が寄進財とされていたと推察される。これらのことから、ゼンギャネ一族が所有する不動産のうちワク

30) Parvande 2, Kermānshāh, Ārshiv-e Sāzmān-e Owqāf (Daftar-e Asnād va Shenāsā'i-ye Mowqūfāt).

31) ケルマーンシャー州ワクフ局に保管された本文書は、Keshāvarzにより翻刻されている (Zendegan: 34-39)。なお、氏のご厚意により、氏の所有する文書の複写を撮影させていただいた。

フとされたものの割合は、その資産価値はともかく、件数にして3割程度であったことがわかる。また、仮にアブドルバーキー・ハーンが所有する物件に限っても、52件のうち22件が寄進財であり、4割を越える程度である。もちろん、上記4件以外にもワクフに設定されたが、その文書が残っていない物件もあるかもしれない、実際にはこの割合はもっと高くなる可能性はある。いずれにせよ、これまでワクフが私有財産を実質的に保全する制度として機能してきたとされ、寄進財の研究を通じて個人あるいは家系の資産状況が推定されることもあったが、事例によっては、こうした前提は成り立たないことを示していよう³²⁾。

4—不動産の地理的分布

つぎに、ザンギャネー族の不動産集積において、何らかの意図が働いていたのか、その地理的分布に注目して確認してみよう。

図2は、ザンギャネー族の不動産のうち現在の地図で確認し得たおよそ70件について図示したものである。この地図からまず気がつくのは、ケルマーンシャーの東部および東北部に物件が集中していることである。これらの地域に多くの村を所有し、ケルマーンシャー市内部にも多数の店舗や隊商宿もっている。これは、容易に説明することができる。すなわち、アーリー・バーリー・ベグの息子で、シェイフ・アリー・ハーンの兄であったシャーロフ・ソルターン Shāhrokh Soltan がケルマーンシャー地方の知事に任じられて以降、ほぼ独占的にこの地域の知事にはザンギャネー族のものが任じられており、任地である（そしておそらくザンギャネー族の居住地でもあった）これらの地域で積極的に不動産取得を図ったものと思われる。

ハマダーン州の物件についても、アー

リー・バーリー・ベグ以来、しばしばザンギャネー族のものが占めてきた主馬頭職の「給与地」 toyūl としてダルギャズィーンとアサダーバードが指定されていたことが史料から確認できる (Alqab: 26)。この職はザンギャネー族がなかば世襲的に維持してきたものであり、少なくとも1722年の時点でもアブドルバーキー・ハーンのおじホセイーン・アリー・ハーンが就いている。したがって、彼らがこの地域に深い関わりを持っていたことはまちがいない、かかる背景のもとに、これらの地域の不動産を集積した可能性は十分にある。

以上のように、役職にともなう地縁を通じての不動産集積がこのような地理的分布をもたらした理由のひとつとなったと考えられるが、ここではもうひとつ、別の可能性も指摘したい。

すなわち、ここで問題となっている地域は、古代以来、メソポタミアからイラン高原へと至る交易路の一部を構成しているが、ザンギャネー族が、この地域のこうした特性を生かし、オスマン朝方面とイラン高原とを結ぶこの交易路の整備や安全確保、ひいては商業の発展のためにこれらの不動産を集積したのではないかという可能性である。

その中心となるのが、ケルマーンシャー市の発展である。

集落としてのケルマーンシャーの起源は古い。サーサーン朝の王たちがしばしばここに居住したことが知られるが、イスラム時代に入っても、アッバース朝第5代カリフ、ハールーン・アッラシード Hārūn al-Rashid (786-809) やブワイフ朝のアドッド・アッダウラ Aḍud al-Dawla (949-983) らがここに宮廷を構えたと言われる。ただし、町はバグダードから中央アジアにいたるホラーサーン街道に立地していたとはいえ、同じ街道沿

32) 注22にあるように、カージャール朝期については同様の事例が既に報告されている。また、注3にあげた阿部2009、阿部2010は、ドンボリー家が、ワクフ制度によらずとも資産の持続的な継承を図っていたことを明らかにしている。

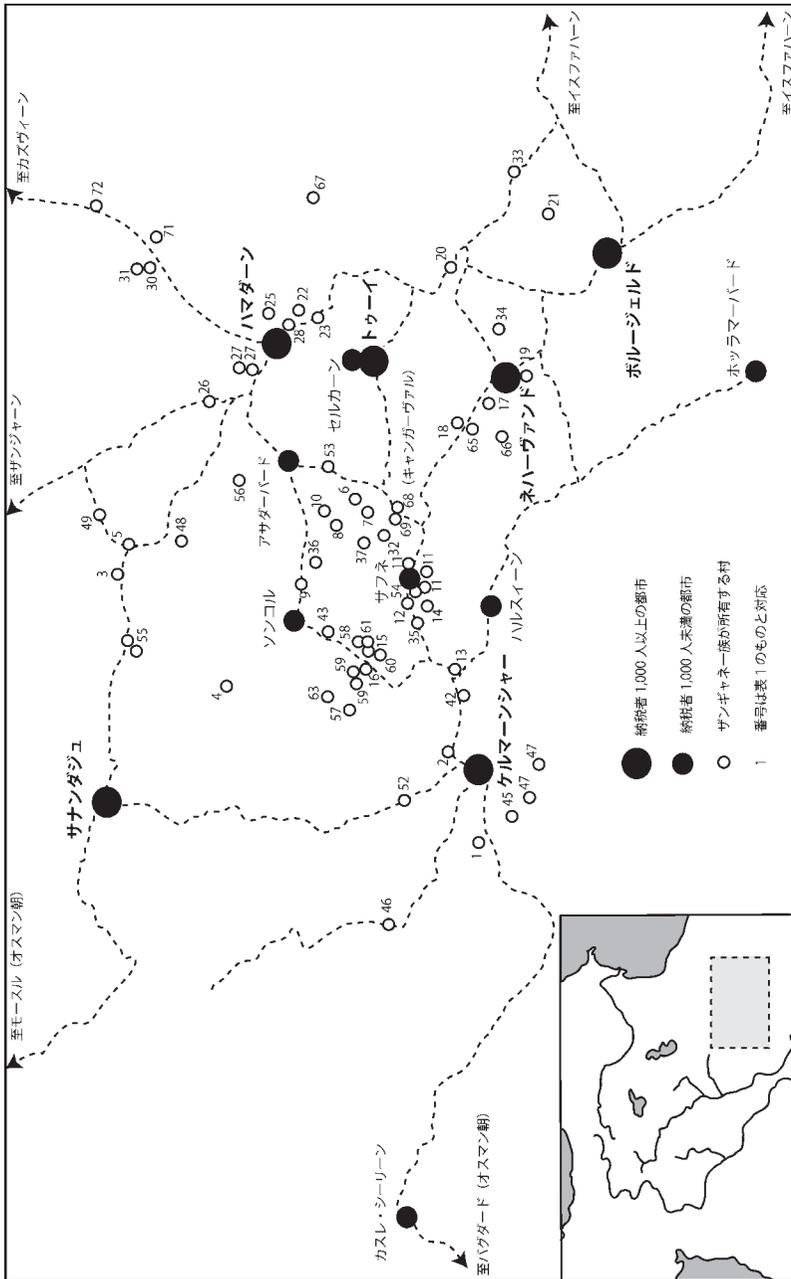


図2 ザンゲネー族所有の不動産の地理的分布

いのディーナヴァル Dinavar やハマダーンに比してその重要性は低かったようだ。当時、この町を含む周辺一帯をジェバル Jebāl 州と呼んだが、10世紀の地理学者イブン・ハウカル Ibn Hawqal はジェバル州の主要都市の中にケルマーンシャーを含めることな

く、単に、水が流れ樹木や果樹があり、生活は安く牧草地も豊かで多くの家畜が飼育される心地よい町として描くにとどめている (Lambton 1980)。モンゴルによって征服された後の14世紀、地理学者ハムドゥッラー・ムスタウフィー Ḥamdullāh Mustawfī は、

かつて中規模都市であったケルマーンシャーが、今では単なる村にすぎなくなると記している (Nuzhat: 106)。

16世紀になってこのあたり一帯はサファヴィー朝の支配下にはいるが、史料に見る限り、この時代にも、ケルマーンシャーは都市としてさしたる発展を見せていない。1533年から1536年にかけてオスマン朝のスレイマーン1世が行ったサファヴィー朝遠征の経路を記録したマトラクチュ・ナスーフ Matrakçı Nasûh の『スルタン・スレイマーン・ハーンの両イラク遠征の宿駅の記述』にも、ケルマーンシャーの東に位置するディーナヴァルやソソコル Sonqor は現れるが (Matrakçı: 41a), ケルマーンシャー自体は触れられていない。また、16世紀末にクルド系諸侯の事績を記したシャラフ・ハーン・ビドリースー Sharaf Khan Bedlisi による『シャラフの書 Sharaf-nâme』にも、同じくディーナヴァルについての記述はあるが、ケルマーンシャーは見あたらない³³⁾。

17世紀になってようやく、町は発展の手がかりをつかむ。シャーロフ・ソルターンがこの地域の知事に任じられた1630年代末には、まだケルマーンシャーとは呼ばれず「ソソコルとディーナヴァルの知事」とされるなど (Dheyl: 246, Kholasat: 286, Khold: 282, 303, 335, 357), ケルマーンシャーがこの地域の中核都市であるとの認識はなかったと思われる。ところが、17世紀半ば、おそらくシェイフ・アリー・ハーンがケルマーンシャーの知事であった時代にイランを訪れたオスマン朝の旅行家エヴリヤ・チェレビーは、この町が、広い平野にあって日干し煉瓦で作られた五角形の美しい城塞であり、中には美しい建築物や庭園、菜園があったと記している³⁴⁾。

シェイフ・アリー・ハーンがケルマーン

シャーの知事であったころから隊商宿や橋梁の建設など交易路の整備に努めていたことは、当時の史料からもうかがえる。1660年代半ばにイランを訪れた仏人旅行家テヴノー Jean Thévenot は、バグダードを出発してカスレ・シーリーンを抜けてサファヴィー朝領に入り、ケルマーンシャーの手前にあるマーヒーダシュト Māhidāsht の隊商宿に滞在しているが、その宿が「シェイフ・アリー・ハーン」と呼ばれていたと証言している。さらに、ケルマーンシャーを抜けて、キャンガーヴァル Kangāvar からアサダーバード Asadābād に至る途中、カレ・スー Qare Sū 川に架かる橋もまた「シェイフ・アリー・ハーン」と呼ばれていたという (Thévenot: 68-71)。先に挙げたビーソトゥーンの隊商宿も含め (注26参照)、彼が早くから商業の活性化を図っていたことがわかる。

あるペルシア語史料は、ケルマーンシャー知事としてシェイフ・アリー・ハーンが細心の注意をもって街道の治安維持に努めたことを次のように伝えている。

上記のもの [シェイフ・アリー・ハーン] は管理と秩序にことのほか気を配る人物である。たとえば、性質上、追いはぎや窃盗といった賞賛すべからざる行為の目立つキャルホル族とザンギャネ族をよく管理し、旅行者、商人、巡礼者も、彼の所領にある限りは、商品や所持品の世話や保護が必要ないほどであった。また、金貨を積んだある商人のラバが道中、そのものの不注意で行方不明になったときも、3日後、その金額がそのまま、手が触れられたり奪われたりすることなく、上記のもの [シェイフ・アリー・ハーン] の元に届けられ、持ち主のもとに返されたのであった。彼が統

33) たとえば, Sharaf-name: 318-319.

34) Evliya Çelebi: 213. ただし、ハマダーン市などに比べるとケルマーンシャー市についての記述はきわめて簡略で、エヴリヤ・チェレビーが実際にこの町を訪れたかどうか疑念が残る。とはいえ、仮に伝聞であったとしても、ケルマーンシャーが都市として発展していたことの証左とはなる。

治していたときには、殺人を犯すものはなかったし、彼が諸事を処理する際には、光り輝く聖法の道以外の道をたどることはなく、統制の首輪をつけず、ごろつきとなっていたキャルホルやザンギャネの悪魔のごとき性質を持ったものたちも、いまでは、礼拝の時間に気を配り、部隊の召集にも応じ、神聖な聖法の儀礼の履行において、大巡礼や小巡礼の実行、ザカートの支払い、細かな義務や望ましい行為にも着手するのを怠ることはない (Jahan-ara: 331)。

また、シェイフ・アリー・ハーンの息子、おそらくホセイン・アリー・ハーンか、シャー・コリー・ハーンが知事職にあった (Matthee 1994: 92) 1674年10月にケルマーンシャーの近くまでやってきたイタリア人旅行家ベンボ Ambrosio Bembo は、「14日、(ハーンに仕え、オスマン朝に向かう隊商を確認している) 書記がやってきて全員の名前と隊商の商品の総数を書きとめた。彼の帳簿は、その後、ケルマーンシャーのハーンによって署名された。…署名された帳簿は、その後、国境に住む役人のもとに運ばれて、彼が再度全てを確認するのである」と証言している。また、このとき、ベンボがこの書記に便宜を図ってくれたお礼をしようとしたところ、ハーンに罰せられるのを恐れて固辞したという (Bembo: 384-385)。西部国境に近いケルマーンシャーが、オスマン朝との交易の窓口として機能していたことを物語っている。

オスマン朝の作成した検地帳 TT912 によれば、1720年代初頭の時点で、この町には1086人の担税者 (ほぼ成人男子に相当) が

おり、そのうちキリスト教徒が15名、ユダヤ教徒が53名であり、残りはすべてイスラム教徒であった。ハマダーンやネハーヴァンドといった周辺の主要都市と比較するとやや小さいが、同じ史料では、ソンコルの町には177人、ディーナヴァルの中心的な町であったサフネ Şahne には116人しか成人男子がいなかったことと比較すると、ケルマーンシャーが大きな町として発展していたことが知られる。オスマン朝による占領の影響を考えるならば、サファヴィー朝崩壊以前にはさらに多くの人口を抱えていた可能性が高い。こうしたことから、ザンギャネ一族が知事に任じられたのをひとつの契機として、この町がハマダーンとイラク方面を結ぶ交易路として大きく発展したのは疑いを入れない³⁵⁾。事実、検地帳によれば、町には公衆浴場、隊商宿、市場、屠殺場、皮なめし場、石鹼製造所、染色場などがあったことが確認され、商業や手工業が発展していたことがうかがえる。

財産目録には、ザンギャネ一族がケルマーンシャー市内の商業施設および公共施設のうち、「3つの隊商宿、98の店舗、コーヒー店と、3つの店舗、フェイザーバード Feyzābad 街区³⁶⁾の3つの公衆浴場」を所有していたことが記されている。これらの施設が、検地帳が記しているさまざま商業施設や公共施設の中でどれくらいの比重を占めていたかを正確に確認することはできないが、ザンギャネ一族が商業開発のために積極的に投資していたことはまちがいない。

他方、ハマダーンは、ザンギャネ一族が特に統治していたわけではない³⁷⁾。しかしながら、すでに指摘したように、ハマダーンの町

35) 17世紀後半には、ケルマーンシャーのみならずイラン西部各地において都市化が進んだと思われる (山口 2011: 163)。これは、イスファハーンへの遷都やその繁栄など、イラン全体の商業ネットワークの変容と関わった現象だと思われるが、これについては稿を改めて論じる予定である。

36) 検地帳 TT912 には、ケルマーンシャー市の全部で12ある街区のひとつとして登録され、43名の担税者があった (TT 912: 21-22)。

37) 17世紀半ばから17世紀末にかけては王領地となっており、その後は、再び知事が任じられるようになったが、ザンギャネ一族が知事につくことはなかった (Röhrborn 1966: 122)。

でもシェイフ・アリー・ハーンはマドラサ運営のために多くの商業施設を寄進しており、ケルマーンシャー同様、商業発展のために積極的に投資していたことがうかがえるのである³⁸⁾。

以上2点に加え、残りの不動産の分布状況から言えるのは、おそらくは交易路に沿って意識的に不動産を取得したのではないかという点である。この付近の交易路は、地図に示したように、ケルマーンシャーの町から東に進み、ビーソトゥーン（地図の13付近）を経て、サフネ方面とソソコル方面の二手に分かれる。サフネ方面の道はさらにキャンガーヴァル付近を経て、ハマダーンに進むもの、トゥーイに進むもの、ネハーヴァンドに進むものに分岐する。地図を見ればわかるように、ザンギャネー族は、ケルマーンシャーからハマダーンにかけての交易路沿いの多数の村を所有していた。このほか、ハマダーンからサナンダジュ方面、カズヴィーン方面、さらにはイスファハーン方面に向かう経路にも、数は多くないが、彼らの村が点在していた。ネハーヴァンド周辺についても同様である。

また、それぞれの交易路において、比較的大きな村を所有していたことも特徴的である。キャンガーヴァル村をはじめ、アサダーバードのファシュ Fash 村、エスファンダーバードのサリーシャーバード Sarishābād 村、ハマダーン市周辺のソルハーバード村（注19参照）、シェヴェリン村、ヤルパン Yalpān 村、バハール村などは、検地帳によるといずれも担税者数にして80名を越えており、30人未満が大半であった当時としてはかなり大きな村である。こうした大規模村落は、拙稿で示した通り、しばしば交易路上にあって宿場町としての機能を果たしており（Yamaguchi 2003: 170-175）、一族はこうした村をおさえることで、交易路の管理を図る

うとしていたのではないかと考えられる。

以上のことから、不動産取得にあたり、交易路沿いや主要都市周辺で村を所有しようという意志もまた一定程度働いていたことが推測される。このことは、ハマダーンやケルマーンシャーでの商業施設への投資活動とも符合しよう。とくに知事として統治していなかったハマダーン州において土地集積を進めた理由のひとつには、こうした動機があったのではないだろうか。

シャー・アッパーズの時代以降、とりわけ交易路の安全確保と商人の滞在先としての隊商宿の建設が積極的に進められたことはよく知られている。ザンギャネー族による不動産取得もこの文脈でとらえるべきであろう。交易路沿いに村を所有することが商業の活性化にどのように寄与したのかを具体的に検証することは困難である。しかし、交易路上に村をもつことで、たとえば、その住民を道路や橋、隊商宿の建設や補修などのための労働力として動員することも可能であったと考えられる。そこには、個々の不動産からの収入確保という目的を越えて、より高度な視野から不動産集積を図ろうという意図が見え隠れするのである。

おわりに

本稿は、サファヴィー朝後期を代表する名家のひとつ、ザンギャネー族の財産目録を取り上げて、その所有状況の特徴を指摘した。以上の考察から、以下の3点を指摘することができる。

第1に、ザンギャネー族の資産に関する限り、一族の個々の構成員、あるいは複数の構成員によって村全体が所有される事例が少なくなかった。こうした現象が、ザンギャネー族に固有のものなのか、それとも他の名家に

38) オスマン朝征服直後に作成された検地帳から見るハマダーン市などの商業活動については、Yamaguchi 2003: 167-169 を参照。

も見られるのかについては今後さらなる検証が必要ではあるが、このことは、地主と農民との関係にもかかわる重要な問題である。なぜなら、これまでの通説では、前近代のイラン社会においてはしばしば村が、必ずしも互いに血縁ないしは姻戚関係を持たない複数の地主によって共同で所有されるが故に、個々の地主が村全体の生産性向上を目指して投資する意欲を欠き、それがイランの農村の停滞を招いてきたともいわれたが³⁹⁾、ここで見たような、村全体を特定の個人あるいは一族が所有している場合には、生産性向上へのインセンティブが働いたとも考えられるからである。

第2に、少なくともこの事例に関する限り、財産全体に占めるワクフのもつ割合は決して高くはなかった。もちろん、ワクフのもつ社会的な機能や財産保全や相続上の役割は否定できないし、実際、ザンギャネ一族に属するものたちも、それぞれが積極的に寄進を行っていた。本稿では現存するワクフ文書4例を紹介するにとどまったが、先に言及したように、ベフバハーンなどのものを含めれば、より多くのワクフを建設していたに違いない。いずれにせよ、ひとつの事例から一般的な結論を導き出すことはできないが、財産保全手段としてのワクフの重要性については、すでにカージャール朝期の事例に関して指摘されているとおり、より慎重に判断する必要がある。

第3には、不動産取得にあたり、任地や給与地で積極的な財産形成を行ったことはおそらくまちがいないだろうが、他方で、交易路の結節点としてのこの地方の性格を存分に活用しながら、交易路上に不動産を所有し、それを足場として商業活動の円滑な発展を図ろうとしていたことも可能性として指摘できるであろう。そこには、個々の不動産からの収

入確保という思惑もさることながら、交易の活性化や社会資本の整備のために不動産集積を図ろうという意図が読み取れ、エリート家系と地域社会との関わり方のひとつの姿を示しているのではないだろうか。イラン社会においては、ワクフ制度などを通じて名望家が社会資本の整備に努めたことがよく知られるが、ザンギャネ一族の場合、隊商宿や橋梁の建設などに限らず、不動産集積自体にもそうした意図を読み取ることができるように思われるのである。

参 考 文 献

●未公刊史料●

- Başbakanlık Osmanlı Arşivi
Mühimme Defterleri 135.
TT (Tapu ve Tahrir Defterleri) 906, 907, 912.
MM (Maliyeden Müdevver) 590.
Ali Emiri, III. Ahmed, 425.
Ketâbkhâne-ye Markazî va Markaz-e Asnâd-e Dāneshgâh-e Tehrân, Mikrofilm 2181, 7060.
Ârshiv-e Sâzmân-e Owqâf (Daftar-e Asnâd va Shenâsâ'î-ye Mowqūfât), Kermānshâh, Parvande, 2, 200.

●公刊史料●

- Afghan Occupation: Floor, Willem. 1998. *The Afghan Occupation of Safavid Persia 1721-1729*, Paris: Association pour l'Avancement des Études Iraniennes.
Alqab: Mîrzâ 'Alî Naqî Naşîrî. 1371kh. *Alqâb va Mavâjeb-e Dowre-ye Salâtin-e Şafaviye*, ed. Yûsof Raḥîmlû, Mashhad: Enteshârât-e Dāneshgâh-e Ferdowsî.
Badaye: Mîrzâ 'Abd al-Nabî Sheykh al-Eslâm Behbahâni. 1389kh. *Badāye' al-Akhhâr, Vaqāye'-e Behbahân dar Żamân-e Ḥamle-ye Maḥmūd Afghân*, ed. Seyyed Sa'îd Mîr Moḥammad Şādeq, Tehrân: Mîrâş-e Maktûb.
Bembo: Ambrosio Bembo. 2007. *The Travels and Journal of Ambrosio Bembo*, Translated from the Italian by C. Bargellini, Edited and Annotated with an Introduction by A. Welch, Berkeley, Los Angeles, London: University of California Press.

39) Floor 1998: 6. なお、拙稿 Yamaguchi 2006 では、本稿で扱ったのと同じオスマン検地帳を用いて、ハマダーン州において都市指向型の果樹栽培が都市周辺や交易路沿いの村で盛んに行われていたことを指摘し、農村部においても経済利潤を目的とした農業生産が行われていたことを指摘した。

- Dheyl: Eskandar Beg Torkamān Monshī va Moḥammad Yūsuf Movarrekh. 1317kh. *Dheyl-e Tārikh-e Ālam-ārā-ye 'Abbāsī*, ed. S. Khwānsārī, Tehrān: Eslāmiye.
- Evliyā Çelebi: Evliyā Çelebi b. Derviş Mehmed Zillī. 2001. *Evliyā Çelebi Seyāhatnāmesi*, Topkapı Sarayı Bağdat 305 Yazmasının Transkripsiyonu-Dizini, ed. Y. Dağlı and S. A. Kahraman, Istanbul, vol. 4.
- Farsname: Hājj Mirzā Ḥasan Ḥoseynī Fasā'ī. 1388kh. *Fārsnāme-ye Nāserī*, ed. M. R. Fasā'ī, Tehrān: Amir-e Kabir.
- Hedges: William Hedges. 1887. *The Diary of William Hedges Esq. during his Agency in Bengal; as well as on His Voyage Out and Return Overland*, ed. R. Barlow and H. Yule, London, vol. 1.
- Jahan-ara: Mirzā Moḥammad Ṭāher Vaḥīd Qazvinī. 1383kh. *Tārikh-e Jahān-ārā-ye 'Abbāsī*, ed. Seyyed Sa'īd Mir Moḥammad Şādeq, Tehrān: Pazhūheshgāh-e 'Olūm-e Ensāni va Moṭāle'at-e Farhangī.
- Khold: Moḥammad Yūsuf Vāle Qazvinī Eşfahānī. 1380kh. *Irān dar Żamān-e Shāh Şafī va Shāh 'Abbās-e dovvom (1071–1038 Hejrī-ye Qamarī)*, *Khold-e Barīn*, ed. M. R. Naşīrī, Tehrān: Anjoman-e Aşār va Mofākher-e Farhangī.
- Kholasat: Moḥammad Ma'sūm b. Khwājegi Eşfahānī. 1368kh. *Kholāşat al-Siyar, Tārikh-e Rūzgār-e Shāh Şafī Şafavī*, ed. I. Afshār, Tehrān: 'Elmi.
- Küçük Çelebizade: Asım Efendi Küçük Çelebizade. 1282AH. *Tārikh-i İsmā'il Asım Efendi*, Istanbul: Matbaa-i Amire.
- Madrase: Manūchehr Sotūde. 2535, "Savād-e Tūmār-e Vaqfnāme-ye Madrase-ye Bozorg-e Hamadān az Mowqūfat-e Sheykh 'Alī Khān Zangane Vazir-e Shāh Soleymān," *Nashriye-ye Gorūh-e Tārikh*, shomāre-ye yek, sāl-e avval: 159–199.
- Matrakçi: Nashū's-Silāhī, (Matrakçi). 1976. *Beyān-ı Menāzil-i Sefer-i 'Irākeyn-i Sultān Süleymān Hān*, ed. Hüseyin G. Yurdaydın, Ankara.
- Nader Shah (Floor): Floor, Willem. 2009. *The Rise and Fall of Nader Shah: Dutch East India Company Reports, 1730–1747*, Washington, D.C.: Mage Publishers.
- Nuzhat: Hamd-Allāh Mustawfī. 1918. *The Geographical Part of the Nuzhat-Al-Qulūb Composed by Hamd-Allāh Mustawfī of Qazwīn in 740 (1340)*, trans. G. Le Strange, Leyden: E.J. Brill.
- Sanson: Père N. Sanson. 1695. *Voyage ou Relation de l'État present du Royaume de Perse*, Paris: Chez la Veuve Maber Cramoisi.
- Sharaf-name: Scheref, Prince de Bidlis. 1860. *Scheref-nameh ou Histoire des Kourdes*, publiée par V. Véliaminof-Zernof, Tome I, Académie Impériale des Sciences, St.-Petersbourg, rep., Asāṭir, Tehrān, 1377kh.
- Sicill: Mehmed Süreyyā. 1996. *Sicill-i Osmānī Yāhud Tēzkire-i Meşāhir-i Osmāniyye*, Istanbul: Sebil Yayınları.
- Tevcihat: Başar, F. 1997. *Osmanlı Eyālet Tēvcihāt*, Ankara: Türk Tarih Kurumu.
- Thévenot: de Thévenot, Jean. 1687. *The Travels of Monsieur de Thevenot into the Levant*, London.
- Zendegan: Ardashīr Keshāvarz ed. 1382–1385kh. *Zendegān-e 'Arşe-ye 'Eshq, Majmū'e-ye Asnād-e Vaqfi-ye Edāre-ye Koll-e Owqāf va Omūr-e Khayriye-ye Ostān-e Kermānshāhān, Sharḥ-e Hāl-e Vāgefān be Enzemām-e Tashriḥ-e Tārikh-e Siyāsī-ye Ejetemā'i, Eqtesādī-ye Vaqf-e Ostān*, 3 jeld, Kermānshāh: Ṭāq-e Vostān.

●外国語研究文献●

- Cahen, Claude. 1961. "Réflexions sur le Waqf ancien." *Studia Islamica*, 14: 37–56.
- Floor, Willem. 1998. *A Fiscal History of Iran in the Safavid and Qajar Periods 1500–1925*. New York: Bibliotheca Persica Press.
- Golzārī, Mas'ūd. n. d. *Kermānshāhān-Kordestān, Shāmel-e Banāhā va Aşār-e Tārikhī-ye Asadābād, Kangāvar, Şahne*, Tehrān: Enteshārāt-e Anjoman-e Aşār-e Mellī.
- Hammer, Joseph de. 2000. *Histoire de l'Empire Ottoman depuis son origine jusqu'à nos jours, Tome quatorzième, depuis le Traité de Passarowicz jusqu'à la Paix de Belgrade*, trad. J. Hellert, Istanbul: ISIS.
- Lambton, Ann K. S. 1980. "Kirmānshāh." *Encyclopaedia of Islam*, Leiden: E. J. Brill.
- Lockhart, Lawrence. 1993. *Nadir Shah, A Critical Study Based Mainly upon Contemporary Sources*. First Indian Edition, Jalandhar: Asian Publishers.
- Matthee, Rudi. 1994. "Administrative Stability and Change in Late-17th-Century Iran: The Case of Shaykh 'Alī Khān Zanganah (1669–1689)." *International Journal of Middle East Studies*, 26(1): 77–98.
- Matthee, Rudi. 2012. *Persia in Crisis, Safavid Decline and the Fall of Isfahan*. London and New York: I.B. Tauris.
- Röhrborn, Klaus M. 1966. *Provinzen und Zentralgewalt Persiens im 16. und 17. Jahrhundert*. Berlin: Walter de Gruyter & Co.
- Sefatgol, Mansur. 1999. "The Question of Awqāf under the Afsharids (1735–1803/1148–1218):

Safavid Heritage and Nadir Shah's Measures." *Matériaux pour l'Histoire économique du monde iranien* (Rika Gyselen et M. Szuppe, eds.). 209-232, Paris: Association pour l'Avancement des Études Iraniennes.

Tucker, Ernest S. 2006. *Nadir Shah's Quest for Legitimacy in Post-Safavid Iran*. Gainesville: University Press of Florida.

Uzunçarşılı, İsmail Hakkı. 1988. *Osmanlı Tarihi, IV. Cilt, I. Bölüm, Karlofça Anlaşmasından XVIII. Yüzyılın Sonralarına Kadar*, Ankara: Türk Tarih Kurumu.

Yamaguchi, Akihiko. 2003. "Urban-Rural Relations in Early Eighteenth-Century Iran—a Case Study of Settlement Patterns in the Province of Hamadan." *Persian Documents: Social History of Iran and Turan in the Fifteenth-Nineteenth Centuries* (KONDO Nobuaki ed.), 147-185, London and New York: Routledge Curzon.

Yamaguchi, Akihiko. 2006. "A Note on Fruit Cultivation in the Early Eighteenth-Century Hamadan Province." *Eurasian Studies, Liber Amicorum, Études sur l'Iran médiéval et moderne offertes à Jean Calmard* (Michele Bernardini, Masashi Haneda and Maria Szuppe, eds.), 377-392, V(1-2).

Yamaguchi, Akihiko. 2012. "Shah Tahmāsp's Kurdish Policy." *Studia Iranica*, 41: 101-132.

とクルド系諸部族—宮廷と土着エリートの相関関係—『歴史学研究 2011 年増刊号』885: 157-165.

原稿受理日—2013 年 7 月 6 日

●邦語研究文献●

阿部尚史 2009 「財産と相続からみた 18-19 世紀
タブリーズのナジャフコリー・ハーン・ドン
ボリー—族」『西南アジア研究』70: 48-75.

——— 2010 「19 世紀イランの地方社会の有力
者による「財産保有」策—ファトフアリー・
ハーン・ドンボリーの二通の遺産目録を手が
かりに—」『東洋学報』92: 1-27.

岩武昭男 1999 「イスラーム社会とワクフ制度」
『岩波講座世界歴史 10 イスラーム世界の発
展』269-291, 岩波書店.

近藤信彰 1994 「ヤズドのハーン家の社会経済的
背景—建設事業とワクフを中心として」『東洋
学報』76: 170-140.

——— 1996 「19 世紀シーラーズの名家と地方
社会」『歴史学研究』685: 13-24.

——— 2001 「マヌーチェフル・ハーンの資産
とワクフ」『東洋史研究』60 (1): 1-33.

山口昭彦 2000 「オスマン検地帳に見る 18 世紀初
頭イランの地方社会 (1) —イラン西部アルダ
ラーン地方の農村と遊牧民社会—」『東洋文化
研究所紀要』140: 211-268.

——— 2007 「タフマースプの対クルド政策」
『上智アジア学』25: 81-123.

——— 2011 「サファヴィー朝 (1501-1722)

表 1 財産目録に記載された不動産とその所有状況

	名称	所属	所有者と持分	納税者数	ワックフ
1	Qomeshe	Māhidasht	AB (Z), 6/6	24	ESH
2	Ṭāq-e Vostān	Kermānshāh	AB (Z), 6/6	21	HA
3	Sarīshābād	Esfandābād	Abol-Faṭḥ Beg (Z), 6/6	255	
4	Būrake	Esfandābād	Eshāq Khān (Z), 2/6; Ja'far, 3/6; Moṣṭafā 1/6	6	
5	Sheykh Ja'far	Esfandābād	Eshāq Khān (Z), 6/6	43	
6	Gonbale	Asadābād	AB (Z), 6/6	19	○
7	Fash	Asadābād	Eshāq Khān (Z), 6/6	136	
8	Būtervān	Asadābād	AB (Z), 5.5/6; 'Ali Ne'mat 0.5/6	18	
9	Mārān	Asadābād	Moḥammad Rezā の相続人 (Z), 3/6; Moḥammad Efendi 3/6	3	
10	Laklak	Asadābād	'Abd ol-hādī (Z), 2.5/6; Moḥammad Sādeq (Z), 2/6; Allāh Virdī (Z), 1/6; Nāzer 'Ali (Z), 0.5/6	21	
11(1)	Sarāb	Nehāvand	Abol-Faṭḥ Beg (Z), 11/16; Shāh Karam, 3/16; Rāke?, 2/16	7	HA?
11(2)	Argene	Nehāvand	Abol-Faṭḥ Beg (Z), 6/6	16	
11(3)	Kāriz	Nehāvand	Abol-Faṭḥ Beg (Z), 6/6	5	
12	Samangān	Chamchamāl	AB (Z), 4.5/6; Moḥammad Naṣīr, Moḥammad Mahdī, Moḥammad Ṭāher, 1/6	0	
13	Qare Valī	Chamchamāl	'Abdollah (Z), 6/6	29	BIS
14	Gāv Kol	Chamchamāl	Allāh Virdī (Z), 5.5/6; Mīrzā, 0.5/6	10	
15	Bābā Kamāl	Dīnavar	Eshāq Khān (Z), 4.5/6; Karam Shāh, 1.5/6	0	
16	Jilāne	Dīnavar	Rezā Qolī (Z), 6/6	0	
17	Chūlak	Nehāvand	'Abdollah Beg (Z), 16/24; 村民, 8/24	75	
18	Vasaj	Nehāvand	'Abdollah Beg (Z), Eshāq Khān (Z), 6/6	22	○
19	Feyāzmān	Nehāvand	AB (Z), 6/6	0	
20	Mehrabād	Malāyer	AB (Z), Shāh Virdī (Z), 6/6	24	
21	Bidkorpe	Malāyer	AB (Z), 6/6	8	
22	Yalpān	Hamadān	AB の親族 (Z), 2.5/6; Heydar, 1/6; Mir Aḥmadī, 0.5/6; 村民, 2/6	97	
23	Enjelās	Hamadān	'Ali Rezā (Z), 4/6; Ḥājī Loṭfollah, Moḥammad 'Ali, 2/6	0	
24	枝村 'Ali Būlāghī	Hamadān	不明	0	
25(1)	Sorkhābād	Hamadān	AB (Z), 6/6	89	
25(2)	Kūregāh	Hamadān	AB (Z), 6/6	32	
26	Khoshāb	Hamadān	AB (Z), 6/6	7	MAD
27(1)	Bahār	Hamadān	AB (Z), 6/6,	87	○
27(2)	Yegnābād	Hamadān	'Abdollah Beg (Z), 3/6; Eshāq Khān (Z), 3/6	37	
28	Sheverīn	Hamadān	'Abdollah Beg (Z), 4/6; 村民, 2/6	268	○
29	Pir Mobārekān	Hamadān	AB (Z), 6/6	0	
30	Kerdābād	Hamadān	Nāzer 'Ali (Z), 6/6	43	
31	Par Dare	Hamadān	Rezā Qolī (Z), 6/6	不明	
32	枝村 Abdāl Ṭaj al-Dīn	Kangāvar	AB (Z), 11/24; 'Ali Yār, Negahdār?, Yāghr? 'Ali Rezā, Pīrzān?, 13/24	10	
33	Parī	Tūy	AB (Z), 6/6	44	
34	Solṭānābād	Tūy	AB (Z), 1/6; 'Abdollah Beg (Z), Eshāq Khān (Z), 5/6	48	○
35	Sagāz	Chamchamāl	Allāh Virdī (Z), 11/24; Moḥammad Ṭāher, Moḥammad Naṣīr, Shokri Virdī, Karam 'Ali, 13/24	19	
36	Cheqā-ye bālā	Asadābād	Najaf Qolī (Z), 6/6	41	
37	Ḥesār	Asadābād	Eshāq Khān (Z), 6/6	5	
38	ケルマーンシャー市の隊商宿 3 軒, 公衆浴場 3 軒, 店舗 101 軒, コーヒー店 1 軒	Kermānshāh	不明	—	一部は HA?
39	ケルマーンシャー郡の園地	Kermānshāh	不明	0	HA?

表 1 続き

	名称	所属	所有者と持分	納税者数	ワクフ
40	ハマダーン市の隊商宿 2 軒 (インド人の隊商宿と Mirzā Kamālā の隊商宿)	Hamadān	AB (Z), 6/6	0	MAD, HA
41	枝村	Doro Farāmān	AB (Z), 6/6	0	
42	Hājjiābād	Kermānshāh	AB (Z), 6/6	24	HA
43	Chaghā Gavānbān	Hārūnābād	AB (Z), 6/6	43	HA
44	Chaghā Jengā	Kermānshāh	AB (Z), 6/6	19	HA
45	Dowlatābād	Māhidasht	AB (Z), 6/6	9	HA
46	Dāyār	Māhidasht	AB (Z), 3/6; Moštāfā, 3/6	22	
47(1)	Zalān	Māhidasht	AB (Z), 6/6	18	HA
47(2)	Gāmizej va mezārī ⁴	Māhidasht	AB (Z), 6/6	6	HA
48(1)	Meyham	Esfandābād	AB (Z), 7/12; Zūlqadr 部族, 5/12	20	HA
48(2)	Oshrorhe?	Esfandābād	AB (Z), 7/12; Zūlqadr 部族, 5/12	39	HA
48(3)	Ganjāh	Esfandābād	AB (Z), 7/12; Zūlqadr 部族, 5/12	14	
49	Mālūje	Esfandābād	AB (Z), 6/6	50	
50	Kāmgerd?	Esfandābād	AB (Z), 6/6	不明	
51	Zarrinchūb	Chamchamāl	AB (Z), 6/6	13	
52	Siyāh Chaghā	Chamchamāl	AB (Z), 6/6	9	
53	Bohrāz	Esfandābād	AB (Z), 3/6; Shāh Virdī (Z), 1.5/6, Rasūl, 1.5/6	9	
54	‘Ali Gorzān	Chamchamāl	AB (Z), 6/6	22	HA
55(1)	Kāzemābād	Esfandābād	AB (Z), 25/48; Mostafā Āghā, Moḥammad Ḥoseyn, Ebrāhīm, Moḥammad Beg, Ja’far, 23/48	13	HA
55(2)	‘Aliābād	Esfandābād	AB (Z), 3/6; Zūlqadr 部族, 3/6	0	HA
56	Permalū	Esfandābād	AB (Z), 2/6; ‘Aziz Beg, 3.5/6; Ḥasan, 0.5/6	14	HA
57	Bozerūd	Dinavar	AB (Z), 6/6	14	HA
58	Karaj	Dinavar	AB (Z), 6/6	14	
59(1)	Armenjān	Dinavar	AB (Z), 3.5/6; ‘Ali Karīm, 1.5/6, Āghā ‘Ali, Chaghatāy Narāni, 0.5/6	27	HA
59(2)	Kank	Dinavar	AB (Z), 4.5/6; Āghā ‘Ali, 0.5/6	6	HA
60	Cheme	Dinavar	AB (Z), 29/96; ‘Abd ol-Rahmān, 3/96; Eshāq Khān (Z), 15/95, Ḥaqq Nāzar, 33/96; ?, 3/96; Shāh Būdāq, 10/96, Ayyūb, 10/96; Sheykh ‘Ali, 2.5/96; Moḥammad Ḥoseyn, 0.5/96; Mortazā, 0.5/96; Morād, 0.5/96; Timūr Khān, 0.5; Yār ‘Ali, 0.5/96	71	HA
61	Jeyhūnābād	Dinavar	AB (Z), 92/96; Monlā Ayyūb, 4/96	0	
62(1)	Kūrtā-ye ‘olya	Dinavar	AB (Z), 6/6	0	
62(2)	Kūrtā-ye soflā	Dinavar	Nārāni, 1/6; ‘Abd ol-Karīm, 1/6; Mākiler?, 4/6	0	
63	Mū’ine	Dinavar	AB (Z), 2.5/6; Mahir?, 3/6, Esmā’il, 0.5/6	8	
64(1)	‘Asad Madi?	Nehāvand	AB (Z), 6/6	14	
64(2)	Kūrne?	Nehāvand	AB (Z), 6/6	14	
65	‘Anbar Qanbar	Nehāvand	AB (Z), 3/6; Nowrūz ‘Ali, 3/6	11	
66	Varzāne	Nehāvand	AB (Z), 4.5/6; Khalīl, 1.5/6	6	
67	Kūzarre	Atāre Marj	AB (Z), 6/6	0	
68	Kangāvar	Kangāvar	Hājji Badr, Hājji Najaf, 1.5/6; Moštāfā Beg (Z), 4.5/6	107	
69	Nahr ol-Dowle	Tūy	Hājji Badr, 0.5/6; ? Beg, ‘Ali Rezā (Z), 0.5/6; Moštāfā Beg (Z), 5/6	12	
70	Māhijān	Simīnerūd	AB (Z), 2.5/6; AB の姉妹, 3.5/6	0	
71	Feyzābād	Dargazīn	AB の代理人, 6/6	0	
72	Kheyrābād	Dargazīn	AB (Z), 6/6	0	

注

1—AB (Z): ‘Abd al-Bāqi Khān。なお, (Z) となっているのは, 確実にザンギャネ一族と同定されるもの。また, 「不明」となっているのは, 所有者が記載されていないもの。

2—納税者数は, TT906, TT907, TT912 による。「不明」となっているのは, これらの台帳で確認できなかったもの。

3—「ワクフ」欄の略号は以下の通り。BIS: ピーソトラーンの隊商宿を対象とするシェイフ・アリー・ハーンのワクフ, MAD: ハマダーンのマドラサを対象とするシェイフ・アリー・ハーンのワクフ, ESH: エスハーク・ハーンのワクフ, HA: ホセイン・アリー・ハーンのワクフ, ○: 財産目録で寄進財とされているが, ワクフ文書では確認できなかったもの。

表2 シェイフ・アリー・ハーン・ザンギヤネ学院（ハマダーン）にかかるワクフ物件

番号	物件	持分
1	故 Mirzā Kamālā の大隊商宿（上下2層で93の小部屋）	394.125/744
2	馬小屋の囲い	
3	馬小屋	
4	金物屋の家屋	430/744
5	中庭（上下2層で49の小部屋）	
6	馬小屋と囲壁	
7	小隊商宿（上下2層）、馬小屋、囲壁	
8	中庭（上下2層で57の小部屋）	
9	馬小屋	
10	上記馬小屋の囲壁、店舗、その他	
11	4軒の店舗（マドラサの列）	靴屋1軒、製本屋1軒、仕立屋2軒
12	17軒の店舗（Mirzā Kamālā 広場からモスクの門まで）	227.25/496
13	17軒の店舗（馬具屋の列）	
14	馬具屋15軒	279.5/496
15	床屋15軒	227.25/496
16	店舗（判読不能）	227.25/496
17	17軒の店舗（モスクの門から Hasan Khan 浴場まで）	1軒（279.5/496）をのぞき、227.25/496
18	王の古広場にある1軒の店舗	
19	薬種屋	6/6
20	ミールザー・キャマーラー大広場の周囲にある61軒の店舗	279.5/496
21	王の広場から鍛冶屋広場にある15軒の店舗	279.5/496
22	薬種屋の列にある4軒の店舗	雑貨屋3/6、雑貨屋279.5/496、薬種屋3/6、ハルワー屋1/6
23	ミールザー・キャマーラー大広場	227.25/496
24	ミールザー・キャマーラー大広場にあるコーヒー店と倉庫	279.5/496
25	Khoshāb 村	ホシャープ村4.75/6、Hārūnābād 枝村69/128、枝村205/288、Chahār Bāgh 園地3/6、Keshmesh 園地2/6、Pir Naẓār 園地、‘Abbās Aghā 園地、Do Nafar 園地、Divānkhānc 小園地、建物と囲壁、倉庫と馬小屋、上の挽き臼3/6、下の挽き臼3/6、新規の挽き臼、冬営地3件1/4、冬営地1件3.5/6

表3 ホセイン・アリー・ハーン・ザンギャネの寄進にかかるワクフ物件一覧

番号	立地	物件	表1での番号
1	Qazvīn	Bāsqaḷ? 村, 建物, 園地, 挽き臼 6/6	
2		Qare Malekī? 村と Javādābād 村 6/6	
3		Eshāl? 枝村 6/6	
4		Kise? 村 (規定の持分により), 挽き臼, バーズ, 囲壁, 住居 dehkade, 公衆浴場 6/6	
5		Garmdarre 村 6/6	
6		Tājābād 枝村 6/6	
7		Miyānrūdān 村 6/6	
8		Gāvmār? 枝村 (規定の持分により)	
9	Esfandābād	Permalū 村 (規定の持分により)	56
10		Dahanjerd 村, 挽き臼, 建物, 住居, 園地, 家屋 6/6	
11		Kāzemābād 村, 囲壁, 家屋 (規定の持分により)	55 (1)
12		Meyham 村, 囲壁, 挽き臼, 住居, 園地 6/6	48 (1)
13		Oshtorhe? 村, 住居, 園地, 店舗 (規定の持分により)	48 (2)
14		Ganjāh 村 (規定の持分により), 園地 (規定の持分により), 枝村 (規定の持分により)	48 (3)
15		‘Aliābād 村, 挽き臼, 住居, 建物, 園地 (規定の持分により)	55 (2)
16	Chamchamāl	Hājjiābād 村 (規定の持分により), 挽き臼, 園地, 建物, 家屋, 屠殺場, 染色場 6/6	42
17		‘Ali Gorzān 村, 挽き臼, 園地, 小園地, 囲壁, 家屋, 部屋, 店舗, 馬小屋 (規定の持分により)	54
18		Nahr-e Shūrāb? 村, 挽き臼 (規定の持分により)	
19	Dīnavar	Bozerūd 村 (規定の持分により), 挽き臼, 染色場, 倉庫 6/6	57
20		Armanijān 村 (規定の持分により)	59 (1)
21		Cheme 村 (規定の持分により), 囲壁, 家屋 6/6	60
22		Ṣahne 村 (規定の持分により), 囲壁, 家屋 6/6	
23	Doro Farāmān	Vostān 村, 園地 6/6	2
24		Sarāb 村 (規定の持分により), 水車, 挽き臼 6/6	11 (1)
25		Kank 村 (規定の持分により), 園地 6/6, 土地片 (規定の持分により)	59 (2)
26	Soltāniye	耕地と建物 (規定の持分により)	
27	Kermānshāhān	Kermānshāh 村, 建物, 小園地 6/6	39?
28		Sarāb 枝村, 園地 6/6	
29	Hārūnābād	Chaghā Jengā 村, 挽き臼, 園地, 染色場, 倉庫	44
30		Chaghā Gavānbān 村, 挽き臼 6/6	43
31	Māhidasht	Dowlatabād 村, 挽き臼, 園地, 建物, 囲壁, 小園地 6/6	45
32		‘Ali Gerd? 枝村 6/6	
33		Gāmīzej 枝村, 挽き臼 6/6	47 (2)
34		Zalān 枝村 (規定の持分により)	47 (1)
35	Gāvrvānī	Gāvrvānī 村, 園地 6/6	
36		Deh-e Lor 村	
37	Eṣfahān	建物, 公衆浴場 6/6	
38		接見の間, 婦人部屋, 小園地, 家屋, パン屋, 配膳室など 6/6	
39		下僕室 6/6	
40		公衆浴場 6/6	
41		倉庫 6/6	
42		パン屋 6/6	
43	Kermānshāh	隊商宿, 店舗 19 軒, 馬小屋 2 軒	38?
44		店舗, 園地 6/6	38?
45	Hamadān	インド人たちの滞在用隊商宿 (規定の持分により)	40